

© 1989 ISIJ

報 告

∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞

第 116 回 (昭和 63 年度秋季) 講演大会記事

第 116 回講演大会は昭和 63 年 11 月 2 日から 4 日まで大阪大学吹田学舎で開催された。

開会式・表彰式

11 月 2 日午前 9 時 30 分から、工学部共同講義棟 U2-211 において開会式、表彰式が行われた。式は木下副会長兼専務理事司会のもと、はじめに加藤健三実行委員長 (大阪大学工学部教授) および八木靖浩会長挨拶が行われた。

八木会長挨拶

本日ここに、諸先輩をはじめ会員諸兄とともに社団法人日本鉄鋼協会第 116 回講演大会を開催いたしますことは、私の最も喜びとするところであります。関西地区における講演大会は、昭和 56 年に京都市で開催して以来 7 年ぶりのことであり、通算 13 回を数えます。

このたびの講演大会開催にあたりましては、大阪大学当局のご理解により多くの会場をお借りすることができ、誠に光栄に存じております。

また、大会の準備に当たりましては、加藤健三大会実行委員長・堀茂徳関西支部長をはじめ、大会実行委員および関係者各位のご努力により本日を迎えることができました。ここに会員を代表して厚く御礼申し上げます。

おかげさまで、今回の講演発表件数は討論を含め 849 件であり、その内容は基礎から応用さらに萌芽・境界技術にわたる将来への意欲が伺われ、ご同慶に堪えないしだいであります。

本日から 3 日間の講演大会が、会員諸兄にとって極めて有意義でありますよう祈念いたします。

また、本会では秋季講演大会に際し、業績の内容により浅田賞、三島賞、林賞ならびに山岡賞の表彰を行っておりますが、本日受賞されます皆様のご業績に敬意を表すると共に心からお祝い申し上げます。

後ほど、雑賀喜規殿と藤田廣志殿には、浅田賞受賞記念特別講演をお願いしておりますので、皆様のご聴講をお願いいたします。

さて、私が本年 4 月に会長に就任して以来、改めて本会の諸事業を見直してみますと、各種事業は、役員、委員のみなさんのご協力により非常に適格に、かつ活発に行われておりまして心強く存じます。国際交流関係では、円高ドル安にもかかわらず、6 月に開催した「加工熱処理の物理冶金国際会議」は、23 か国から 250 名の研究者が一堂に集い、110 件を

超える論文が発表されました。このことは特筆に値するものと存じます。

一方、経済動向は個人消費・設備投資とも増勢を示しております、特に鉄鋼関係では、本年 1 月から 12 月の粗鋼生産量が、1 億 500 万 t を超える見通しで、大変喜ばしいことであります。しかし、これは内需拡大策等による寄与が大きく、今後とも為替不安定の経済下にあつては楽観することはできません。

われわれ鉄鋼の技術、研究に携わる者にとつては、常に鉄鋼を基盤とした科学技術・研究開発の推進こそ必要であると確信いたします。

会員のみなさん、経済動向や粗鋼生産量の増減に左右されることなく、たゆまぬご研鑽をお願いいたします。

つづいて浅田賞・三島賞・林賞・山岡賞の各賞の表彰が行われた (各賞理由は別記掲載)。

特別講演会

表彰式につづいて次の浅田賞受賞記念講演が開催された。

「重工業 30 年の歩みと今後の展開」

石川島播磨重工業(株)取締役技術本部長

雑賀 喜規殿

「超高圧電顕法とそれによる新研究分野」

大阪大学超高圧電子顕微鏡センター長・教授

藤田 廣志殿

講演大会

今秋の講演数は製鉄部門 99 件、製鉄・製鋼共通部門 74 件、製鋼部門 107 件、萌芽・境界領域部門 109 件、加工・システム・利用技術部門 123 件、分析・表面処理部門 63 件、材料部門 228 件、計 803 件の研究が 18 会場にわかれ発表され活発な討論がなされた。

討論会

一般講演の他に次の 5 テーマの討論会が行われた。

1. 原料特性を考慮した塊成鉍プロセスの制御
座長 佐々木盛治 (新日鉄)
2. 二次精錬の役割
座長 萬谷 志郎 (東北大)
副座長 河井 良彦 (NKK)
3. 超塑性の材料加工プロセスへの応用
座長 西村 尚 (都立大)
副座長 西原 公 (国土館大)
4. 粉末成形技術の最近の進歩
座長 滝川 博 (神鋼)

5. 直接鑄造薄板材と材料特性

座長 武智 弘(新日鉄)

懇親会

懇親会は11月2日午後6時より千里阪急ホテルで日本金属学会と合同で開催された。大庭半次新日本製鉄(株)・堺製鉄所副所長の司会により加藤実行委員長、小松金属学会会長、八木本会会長、熊谷大阪大学総長挨拶の後、高村仁一京都大学名誉教授の乾杯で始められた。参加者350名ほどで秋の夜に懇談がなされた。最後に副実行委員長 堀阪大教授の閉会の辞により散会した。

ジュニアパーティー

11月3日午後5時40分より阪大学生食堂にて東北大学葛西君の乾杯の音頭で開催され、若手技術者・研究者間の懇談が行われた。参加者は180名であった。

欠講

今大会において次の講演は欠講された。

1. No. 184 連鑄鑄片のマイクロシティ分布と凝固プロフィールの関係 唐山工学院 宋 実 他
2. No. 270 水平連鑄凝固シェル熱応力モデルに関する研究 唐山工学院 閻 小林 他
3. No. 271 水平連鑄の溶鋼流動に及ぼす間歇引抜きの影響 唐山工学院 王 日紅 他
4. No. 380 ウィスカー強化セラミックスの機械的性質 新日鉄 木下 俊哉 他
5. No. 754 高炭素鋼線熱水焼入れの新しいプロセスに関する開発 中国湘潭大学 譚 玉華
6. No. 755 熱水焼入れ鋼線の顕微鏡組織および機械的性質におよぼす低加熱温度の影響 中国湘潭大学 譚 玉華 他

コ ラ ム

論 文 賞 考

「論文賞」……何と響きの良いことばなのでしょうか！ 読者の多くは、これを一つの目標にして、論文を書かれていると思います。もちろん、筆者もその一人です。数年前、カナダに滞在中、国際電話で自分に賞が与えられると知らされたとき、本当にありがたく、また努力が報われた思いがしました。

筆者の本誌における専門分野は、精錬・製鋼ですが、この領域の論文賞は、本誌俵論文賞、金属学会誌論文賞また Metallurgical Transactions 等の Chipman Award などがあります。いずれもたいへん権威があるものです。

長年の功績の積分値を評価して与えられる、「功績賞」と異なり、 α +編集委員の推薦を受け、選考委員会における投票で決するこれらの賞は、これまでの活動歴によらない、その論文のみを評価の対象にする、時間微分的な評価の結果であるといえます。

さて、鉄鋼協会の会員名簿に掲載されている表彰規程をみると、【第6条、俵論文賞は、本会会誌「鉄と鋼」および“Transactions of The Iron and Steel Institute of Japan”に掲載された前1か年の論文を審査し、学術上、技術上最も有益な論文を寄稿した会員に授与する。】とあります。

この規程によれば、1年間に推薦を受けなければ、選考の対象にもなりません。自薦は認められません。推薦権をもつ誰かに、認められなくてはならないのです。ちなみに、前出の Chipman Award は、過去2年間に出版された論文は、推薦の対象になります。

過去50年以上の歴史の中におそらく、受賞に値す

る論文であるにもかかわらず、推薦者の目に触れず、選考の対象にすらならなかつたこと、運悪く同じ分野に優れた論文が複数あり、その機会を失つたことが少なからずあるのではないのでしょうか。

また、受賞するのは会員であつて、論文ではありません。これも、論文賞の趣旨からすると不思議なことです。“Trans. ISIJ”では非会員からの投稿も認めているのですから、改めるべき点でしょう。AIME が多数の日本人非会員を、表彰していることを、お忘れなく。

さらに賞の推薦規程を読み進めると、【第18条の1、受賞候補者の推薦者は本会理事、前会長、評議員、支部長、常務委員および維持会員とする。(ここまでが前文に言う α である。筆者注) なお本会編集委員は俵論文賞受賞候補者を推薦することができる。(後略)】

論文誌の品質を決定する編集委員は、維持会員以下で、おまけのような取扱いです。論文賞の推薦規程としては、どうも釈然としません。

以上の感想をもとに、より公正な、洩れのない表彰を行うために、三つの提案をします。①前1か年……を、2年間に延長する。そして、自薦を認める。②非会員にも受賞を認める。③論文賞の推薦に「我が社の……」ということはないでしょうが、李下に冠をたださず。この際、法人である維持会員は、論文賞推薦者からは除外すべきでしょう。もとより法人は人間ではないので、論文を読みません。

この欄で、編集委員長を含めた、会員の皆様の御意見をいただきたいと考えます。

(東京大学生産技術研究所 前田正史)